

都市政策・地域経済ワークショップⅡ(第12回) 講義録

【日時】令和5年1月6日(金) 18:30~21:20

【場所】梅田サテライトキャンパス(オンラインでご講演いただきました)

【テーマ】「アートが社会に根ざす街—ベルリン」

【講師】アート・ジャーナリスト 金井美樹氏

1) アート・シーンの概要

・ベルリンで活動して20年が経過しているが、ベルリンやドイツが素晴らしいと言いたいのではなく、異なる土地で異なる文化が育っていくべきだと考えている。

・ベルリンでは、2つの世界大戦やナチズムの負の歴史があり、イデオロギーに抑圧されていた。第二次世界大戦で1949年にアメリカ、イギリス、フランスの占領地だった西側とソ連の占領地であった東側に分断されて、その40年後の1989年に東西を分断していたベルリンの壁が破壊されて1990年に東西ドイツが統一されるという歴史がある。

・東西が分断されていた東側では体制に反するとみなされた作家たちは隠れて創作したり、西側に亡命したりしていた。西側も地域的に陸の孤島になり、ベルリンから人も企業も離れていき、土地の価格も下がっていた。

・そのようなベルリンの活性化に一役買ったのがアートだったと言われている。多くの国際的なアーティストが招聘されてアーティスト・イン・レジデンスのプログラムが始まり、アート・シーンが活発になっていった。ベルリンの壁が崩壊し、新しい時代を模索しようとする新しい風が吹き込み、政治的な弾圧を受けてきた都市だからこそ、より良い社会という人々の思いも強かった。

・2000年代からヨーロッパのアートの中心都市といわれたベルリン。2010年代後半から世界のアート・シーンはゆっくり変化している。

・多くのアーティストがベルリンに暮らしている理由としては、ベルリンはドイツの首都でありながら物価や家賃が安く、他の国へのアクセスも良い。有名なスタジオや著名なアーティストも多く、インフラも整っているため、ドイツや他都市や他国からキュレーターやジャーナリスト、批評家などがベルリンを訪れる機会も多く、制作発表していると彼らの目に留まりやすい。その他、アーティストとして滞在するためのアーティストビザが他国に比べて取りやすく、アーティストやクリエイターのための保険制度も整っている。大学の学費は無料または非常に安いので、下積み時代でも、制作時間を確保しながら最低限の生活ができるというメリットがある。

2) アート・スペースやイベントでは何が起きているのか？

オルタナティブなアート・スペースやアーティストをご紹介します。

①nGbK (Neue Gesellschaft für Bildende Kunst)

<https://ngbk.de/en/>

- ・視覚芸術のための新しい共同体
- ・異なるバックグラウンドをもつ 860 人の会員により構成されていて、平均年齢は 35 歳。
- ・総会には約 200 人が集まり、丸一日かけて議論し、年間のプロジェクトを決める。
- ・宝くじ(ロト)やベルリン市からの助成金を受けている。

②n.b.k. Artothek (Neuer Berliner Kunstverein)

<https://www.nbk.org/de/artothek>

- ・アートの図書館。一定期間、アートを借りて自宅に飾ったりして楽しむ。
- ・パブリックなアートをプライベートな所に届けるのと、作品を購入してアーティストを支援するのが目的。
- ・市の補助金や宝くじ(ロト)の補助金を受けて、ベルリンの若手のアーティストの作品を購入している。

③NuN

<https://www.visitberlin.de/en/nun>

- ・カップルが始めた一夜限りの展覧会を開催している。
- ・アパートメント 1 階のゲストルームを開放しており、直接、外からゲストルームに入れるよう階段をつけている。
- ・作家の作品発表の場やキュレーターを呼んで意見交換の場ともなる。

④Sonntag

<https://sonntagberlin.tumblr.com/>

- ・毎月第 3 日曜日に個人アパートで行われているノマドプロジェクト。リビングルームで一人の作家の作品を見ながら対話をする。会場は持ちまわり制となっている。
- ・作家のリクエストのケーキが用意され、参加者は 2 ユーロのケーキを購入し、サポートする。

⑤Videoart at Midnight

<https://www.videoart-at-midnight.de/>

- ・古い歴史のある映画館を借りて、月 1 回、金曜日の深夜 0 時より一人の作家の映像作品を入場無料で提供している。
- ・作家と主催者によるカジュアルなトークも行われている。

3) 難民の受け入れにまつわる問題とアート・プロジェクト

①シビル・ソサエティ 4.0

Civil Society 4.0 – Refugees and Digital Self Organization / March 3 - March 5, 2016

<https://archiv.hkw.de/en/app/mediathek/project/122867-civil-society-40-refugees-and-digital-self-organization?x=S>

- ・2016年3月にベルリンの世界文化会館で行われた難民の生活環境改善のための支援イベント。ここでは難民という言葉を使わず、ニューカマーとって歓迎する。
- ・他者をどのように受け入れることができるのか、政府に頼らずコミュニティを機能させるにはどのようにするかといったことが議論されていた。また、難民にとって新たな土地でデジタルツールを使い、自身の生活を形成していくためのワークショップも行われた。

②ドイツ人アーティスト ヴォルフガング・ティルマンス氏

Between Bridges

21. April 2016 – Talk by Gülây Akin and Wolfgang Tillmans

14th April 2016 – Opening, Tour of Syria, Bachar Al Chahin

<https://www.betweenbridges.net/>

- ・日本でも知られている写真家。2000年にはイギリスで最も権威のある現代アートの賞であるターナー賞を受賞し、常に多くのアーティストに影響を与え続けている。
- ・2016年より難民の問題にローカルに直接的に貢献したいと思い、ミーティング・プレイスという主に難民支援のプロジェクトを始動させている。
- ・ティルマンス氏への取材を通じて、今やらなければいけない、自分が動かなければならないという気概を感じた。

③トルコのアーティスト ハリル・アルトウンデレ氏

n.b.k. – Space Refugee - Neuer Berliner Kunstverein

<https://www.nbk.org/en/ausstellungen/altindere>

- ・2016年9月から11月に行われた個展でSpace Refugee「宇宙難民」という意味。
- ・難民の受け入れに消極的になっているヨーロッパを皮肉るように宇宙空間を難民の避難所に使うという奇抜な作品展示となっていた。

④これらのアートに関するイベントやアーティストの作品から金井氏のコメント

- ・ベルリンには社会的問題が起こった時、アートにまつわる公的施設や団体が迅速に対応する。展覧会やイベントの反応がとにかく素早い。
- ・アートは時に感覚的なものに訴えることができ、人の考え方やモノの見方を変えること、そして、人の心を動かす力がある。
- ・一方でより多くの人にアート鑑賞や体験をするという行為が浸透するには時間がかかる。

⑤アート・プロジェクト RESIDENZPFLICHT

<http://residenzpflicht.berlin/>

msk7

www.msk7.org

10 things you need to consider if you are an artist ? not of the refugee and asylum seeker

community- looking to work with our community.

<https://www.riserefugee.org/10-things-you-need-to-consider-if-you-are-an-artist-not-of-the-refugee-and-asylum-seeker-community-looking-to-work-with-our-community/>

- ・ドイツではメディアでも取り上げられていない。興味深いプロジェクト。
- ・RESIDENZPFLICHT とはドイツ語で強制的な義務的な居住という意味。難民認定申請者や強制送還者の一時滞在を与えられた外国人に対する法的空間の制限を表す。
- ・2004 年から共に活動する 4 人の女性アーティストコレクティブ msk7 が 2019 年から 2022 年にかけて取り組んだ。
- ・難民施設の新設に伴い、公募が行われて国によって選ばれたプロジェクトで、ベルリン近郊にある 10 の難民宿泊施設に、10 人のアーティストに奨学金が与えられて一カ月間、滞在して制作やワークショップを行った。
- ・ドイツのアートと公共建築の面白い関係。ドイツの建築におけるアートは国レベルで長い伝統があり、州によっても規制が違う。学校や幼稚園、行政庁舎や地方自治体による建築など、公費で造られるすべての建物、道路、広場について建築費用の 1~2%がアートに費やされることになっている。

【ベルリン】ドイツのアートを囲む連帯の現場——Covid-19 の先を見据えて
かないみき（アート・ジャーナリスト）

https://artscape.jp/focus/10161938_1635.html

4) 質疑応答・意見交換

Q) RESIDENZPFLICHT はドイツ国内で批判があったということですが、どのような批判があったのでしょうか。

A) 一カ月間だけアーティストが滞在して何が変わるのか。アーティストとソーシャルワーカーとの違いや難民の生活のどこまで踏み込んでいくべきかについても議論となった。

Q) 社会課題に対してアーティストが入っていくのは海外でポピュラーだと思うが、日本においては社会課題とアーティストが分断されているように感じるが、日本はこれから、どういう風に進んでいくべきか。

A) アートや社会も国によってそれぞれの育ち方があっていいと思う。ドイツ人は普段の会話から政治の話をする。日本人はあまり政治の話をしなない。その違いがある。もっとフランクに政治の話をするようになれば、日本も変わっていくと思う。日本人のアーティストが政治的社会的な作品を作らないことに対して批判的には思わない。

Q) 難民のプロジェクトを開催する目的は何でしたでしょうか。

A) msk7 もプロジェクトが受け入れられるとは思わず作った。難民施設だけで孤立している。このようなプロジェクトがなければ入れないし、アーティストたちが難民施設で何が起きているのか、どういう人たちが暮らしているのかということをブログで発信したりして、一般人が知らなかった難民の生活を、アーティストを通じて伝えられるというのが一番のポイント。